

### 県内景気、厳しい状況

新年になってから2度ほど、県内で講演する機会があった。講演の前後に経済関係者とお話をしてみると、静岡の景気が厳しい状況にあることがよく分かる。全国的に見て、静岡県は経済的に恵まれている地域である。ただ、自動車関連分野に代表されるように、輸出型製造業に大きく依存してきた経済は、有効求人倍率などの雇用の数字で全国平均よりも悪い状況であるといつのだ。

リーマン・ショック後、アジアの経済は速いスピードで回復している。自動車や家電製品などへの需要は急速に拡大している。本来であれば日本の製造業は輸出を拡大し、地域経済は潤うはずである。ただ、日本で完成品を生産して海外に輸出するというビジネスモデルは限界に来ているのだ。

自動車メーカーでも家電メーカーでも、日本国内ではあまり利益が出

ていない。一方で、アジアの市場では高い利益を上げることができる。成熟する市場の中で多くの企業が市場を奪いあっている国内では利益が上げられないが、市場が拡大しているアジアでは利益機会は大い

だ。日本国内の活動を縮小し、利益の大きなアジアにシフトしていくこと

## 旧来型の産業構造から脱却

いこととなる。

中国などの市場で、日本企業は欧米や韓国の企業としてのぎを削っている。欧米や韓国の有力メーカーは、

日本の企業よりもはるかに海外展開を積極的に行ってきた。海外展開のスピードが鈍かった日本企業は、新興市場で不利な競争にさらされている。だから今、必死になって海外展開のスピードを速めている。海外展開を抑えてグローバル競争に負けてしまつのか、それとも海外展開を加速化してグローバル競争を有利に運

ぶのか。どちらを選択するかは目に見えている。海外に出て行く大企業はよい。問題は残された地域経済である。静岡県もこれからこうした厳しい変化の波にさらされることになる。そうした変化の中で重要なことは、一刻も早く20世紀型の完成品輸出型の経済構造から脱却することである。近隣のアジア諸国が急成長することは、本来は日本経済にとってプラス要因

のはずである。しかし、アジアの成長

の恩恵を享受するためには、旧来型の産業構造から脱却する必要があるのだ。

戦後の経済成長の中で、日本はしばしば産業構造を大きく変えてきた。1950年代には繊維などの輸出型の軽工業が日本の産業の主役であった。60年代の高度経済成長期には、重厚長大と呼ばれる鉄鋼や石油化学が産業の主役であり、日本

の経済成長の原動力は公共事業

や耐久消費財需要などの内需であった。1973年の石油ショックを転機に、軽薄短小と呼ばれるエレクトロニクスなどの分野が飛躍した。そして80年代後半以降は、自動車産業が日本の産業の主役に躍り出たのだ。

いつまでも日本経済は自動車や家電だけに依存し続けることはできない。これらの産業はこれからも重要であるが、新たな産業の主役を作り出していかない限り、日本経済の活力を維持することはできないのだ。経済産業省が出した産業構造ビジョン2010で「自動車だけに依存した一本足打法経済」と名付けられた偏った産業構造を脱却しなければならぬ。

静岡県の経済はまさにこの変化の中心にいるのだ。成熟化する国内消費、成長するアジア経済、自動車や家電の海外シフトという流れの中で、次の経済をリードする産業を育てる必要があるのだ。この点については、いづれ何度かに分けて詳しく論じてみたいと考えている。

(総合研究開発機構 理事長・東大教授)